

服従の人、三谷隆正

著者	葛井 義憲
雑誌名	名古屋学院大学研究年報
号	21
ページ	52-62
発行年	2008-12-31
URL	http://doi.org/10.15012/00000578

服従の人、三谷隆正

葛井義憲

はじめに

三谷隆正に対する多くの友人たちの評価は、「真理を愛した人」「正義を愛した人」「神と人とを愛した人」(矢内原忠雄評)、あるいは、「高貴なる精神と人格」の持ち主、「瀟洒たる容貌と輝ける明眸」の持ち主(南原繁評)と高いものであった。優れた精神と人格の持ち主であり、一生を師匠新渡戸稲造に倣って教師として生きた彼は多くの若者たち、人々に真理を伝え、人格的影響を与えていった(『三谷隆正―人・思想・信仰―』、六一頁―六八頁、三六九頁―三八二頁)。

この彼の思想と実践は今日、余り顧みられなくなっている。しかし、人々の精神的荒廃が進み、秩序も確かな展望も失いだした現代社会において、三谷の言行に耳を傾け、それを知る意義は大いにある。小論では、彼の全生涯を見つめ、彼の言行を余すところなく分析、検討することはできないが、「苦難」を超えて徹底して「他力」に生きる彼の様態に焦点をしばって綴る。

一 インマヌエル

「神が私たちとともにいる(『インマヌエル、Immanuel』と、旧約の民、イスラエル人たちが実感したのはモーセの時代であった。モーセは当時、同胞のイスラエル人がエジプトで重労働を課せられ、虐待されている現実に接し、心を痛めていた(出エジプト記二・一二)。そのモーセが神の山ホレブで、神に語りかけられた(同三・四)。その内容はエジプトで虐待され、迫害されている同胞をその国から脱出させ、そして抑圧のない、伸び伸びと生活できる、神が約束した大地、「乳と蜜の流れる土地(『カナン』)(同三・八)へ導く役割をモーセに与えるというものであった。

これはモーセを当惑させ、放心させるほどの過酷な命令であった。そしてモーセは「わたしは何者でしょう。」(同三・一二)と、自らの非力と自信のなさをもって、その命令を固辞する。しかし、その怯えるモーセに対し、神はイスラエル人がエジプトから脱出し、約束の大地へと進み行く間中も「あなたと共にいる」(同三・一二)と告げ、また、「わたしはあなたたち(『イスラエル人』)の神となる」(同六・七)

のだと宣言した。さらに、神はモーセに初めて真の神の名、「ヤハウェ」(「わたしはある。わたしはあるという者だ。」)(同三・一四)であることを知らせた。

ヤハウェは明瞭にこのイスラエル人を神の民と選び、信頼に足る愛をこの民に向け、この選ばれた者たちと一緒に歴史を歩み、彼らの日々の生活のなかで、ヤハウェの正義と愛を表わすことを宣べた。この宣言は現代人にとって、きわめて不可解、驚異の宣言であるが、イスラエル人の歴史を考究すれば、人間の想像をはるかに超えた絶対的な神がモーセに顕れたのだと理解しえる。イスラエル人は神と接したモーセを通して「ヤハウェ」と「神の選び」と「インマヌエル」を実感していった。

三谷隆正(一八八九年二月—一九四四年二月)はこの「エジプトからの脱出と約束の大地に向けて荒野を進み行く」大事業に携わる決断をし、それを推進させるモーセを見つめ、次のように『信仰の論理』(一九二六年)の中に綴った。

「已むなくモーゼは起つた。神に強ひられて起つた。その大事業は決してその野心の産物ではなかった。エホバの意思に対する服従の産物に外ならなかった。然りモーゼの力の源は服従にあつて自恃になかった。エホバに対する絶対服従にのみあつた。その他力のみにあつた。

同じ服従と同じ他力とが、イエスにとつてもその力の源であつた。彼が宣べ伝へたる所は、彼自身の創意や発案に成るものではなく彼がその父なる神より言ふべく命ぜられたる所のものに外ならなかった(ヨハネ伝六・三八)。彼が弟子達に示したる祈禱の模範は、「聖意の天に於ける如く地にも行はれんことを」(マタイ伝六・一) 祈る禱で

あつた。富みて若く、心ばえずぐれたる好青年紳士が、道を求むるの熱心に駆られて、走り来り跪いて、「善き師よ」と彼に呼びかけた時に、「何故我を善きといふか、神独りのほかに善きものなし」(マルコ伝一〇・一八、マタイ伝一九・二七、ルカ伝一八・一九)と警めたのが、イエスであつた。些の私をもとめず、全身全霊たゞ神の命のまゝに行動したのがイエスであつた。『三谷隆正全集』(以下、『三谷』と略す)第一巻、六〇頁。

三谷は逡巡するモーセのうちに、父なる神への服従、神への絶大な信頼、神を中心にして生きる信仰が養われ、それをもって大事業を推進していったことを見出した。そしてそれは、自己の栄達、自己の名譽から遠く離れ、ただ父なる神を賛美し、神に栄光あれと祈る謙遜と犠牲を育むものであつた。しかも、その父なる神への徹底した服従と神への絶大な信頼は、三谷が信従する、モーセから一三〇〇年後のイエスの中で見事に体现されていることを見出していた。

三谷は第一高等学校在学中の一九〇九(明治四二)年の秋に、同高等学校校長、新渡戸稲造の紹介状をもって、一〇数人の同校生と一緒に東京府豊多摩郡淀橋町柏木の内村鑑三を訪ねた。三谷たちは新渡戸から人格教育、精神的指導を受け、また、キリスト教への関心も高める中で、内村から霊的真理の指導を得ようとして、内村訪問を実行した。この彼ら(三谷、藤井武、塚本虎二、黒崎幸吉、川西実三、金井清、高木八尺、鶴見祐輔、前田多門、森戸辰男など)は「柏会」を結成し、内村の門下となつた『三谷隆正一人・思想・信仰』(八頁—一四頁)。このように内村の聲咳に接する中で、三谷は、数々の「苦難、悲哀」の中で痛切に「自己の無力」「神への服従」に気づかされ、

ただ上を仰いでキリストの十字架にすがりつく内村の「十字架の福音」の力強さ、神に絶大なる信頼をおいて生きる内村の信仰に圧倒されていた(『三谷』第四巻、一四七頁―一五一頁)。しかも、その信仰姿勢は「真摯」「謙遜」そのものであり、「まことに全身全霊を以てする真理欣求の戦ひ」(同書、一五五頁)と思われた。

三谷は内村に親炙する中で、彼の「十字架の福音」の力、「神への絶大なる信頼と服従」をもって生きる意義と実践的姿勢をつかみ取っていったようだ。しかし、内村からの大きな影響を受ける以前に、三谷はキリスト教とすでに接触していた。親戚の三谷文子にあてた書簡(一九一九年四月)の中で、一九〇五年頃のことであろう、「僕は中学五年の時に深くも考へないで受洗しました」(『三谷』第五巻、三九九頁)と告げている。彼は、この時期は明治学院普通部に在籍(一九〇一年四月―一九〇六年三月)しており、女子学院教諭の姉三谷民子の監督のもとに、明治学院の寄宿舎生活をしていた頃である。それは家族(三谷は父宗兵衛、母こうの長男、神奈川県神奈川青木村で誕生)が父の郷里、京都府丹後与謝郡岩滝村へ引っ越してしまっただけであった。

彼は民子の監督のもとで、教会生活も送り、洗礼を受けたのだろう。しかし、その教会生活は上の書簡の「深くも考へないで」との表現からも分かるように、彼に心の渇きを覚えさせ、十分に生きる上での指針とはならなかったようだ。その後、彼は内村の門下となる中で、内村の「十字架の福音」に強く捉えられ、信仰を深め、「他力」「服従」の姿勢を強めていった。そして如上の文子にあてた他の書簡(一九一九年二月)では、「愛実行の信仰」「自己中心の信仰を経過し

て愛中心の信仰」について語っている(同書、三九六頁)。この書簡を記した時期は、三谷が岡山の第六高等学校の教授(法制「ドイツ語」担当。同校へは一九一五年九月に就任。同年七月に東京帝国大学法科大学英法科卒業)時代であった。その書簡の内容を少し抄出しよう。

モーゼやボーロが荒野に立つて独り神と交った準備の時代が是(我救はれんが為めに何を為すべき乎)であると思ひます。かゝる時代に於て強いて教会に属するの必要が何処にある乎、僕は何処にもないと答へ度く思ひます。然し信仰に於ても利己或ひは主我は其究極であるべきではありません。荒野に立つて独り準備に忙しかつたモーゼはボーロは再び野を出て人の間に帰るべきです。

自己の救いのみ求めて宮々たりし求道者は「汝の隣人を己の如くに愛する」事、自己を生けるさゝげものとして神前に献じ己の友、己の隣人の為にいと小さきつとめにもはげむ事、それがやがて又自己の救を完うする所以である事を悟るべきです。さうして起つべきです。喜と望とにかゞやく僕たるべきです。(同書、三九五頁―三九六頁)

「利己、主我」を超えて「神への絶大なる信頼と服従」は「キリストの僕たち」に彼らの「友」、彼らの「隣人」にいと小さくても愛の実践を行せてゆくことになると語る。三谷はこの折、すでに「自己」の救済から「愛中心の信仰」への転換を果たしていた。そしてその転換は別言すれば「自分の才能も自分の学問も只神の器として、神の欲したもうまにまに使っていただく。只神様のために、自分を磨き、

自分を浄めよう。」とも表しうる（一九一八年一〇月の文子あて書簡。

『三谷隆正の生と死』、五八頁）。

彼は、各人それぞれの「才能」は神より与えられたものだと理解し、感謝してそれを受けとり、それらを精一杯磨き、浄めて、隣人、社会の幸福、平和のために用いることに努める。それが神に造られた人間としての使命なのだ、と捉えた。そしてこの確信と信仰姿勢は三谷の中で終生変わらないものとなっていたようだ。記載日時は分からないが、三谷は「宗教的個人主義」と題して、青年たちに（東京の第一高等学校教授就任が一九二九年三月）上記の事柄について語っている。

諸君は（中略）己独りを神の大前に投げ出したことがあるか。然し恐らくはやがて時が来て、諸君も亦自家一切をあげて神の大前にひれ伏さざるを得ないやうな破目に陥らるることもあらう。さういふ破目は現世的にはつらい苦しい悲しい破目である。失敗、不名誉、貧等がその名である。然し若しさういふ破目に陥った時、いかに人力の頼むべからずして、神様のみが恃みになる真の力であり愛であるかを悟る事ができ、かくして衷心からの信頼を神様にさぐげ、一切無条件に神様に御任せすることを学ぶやうになるならば、さうした悲しき破目こそ、実は人生に於ける最大最深の祝福である事に気づくに到るであらう。さうして驚くべき力に溢れ、また希望に輝くことができるであらう。（中略）いざ、我らは各々独りとなりて神の大前に親しく祈らう、然る時我らは真に力強くある事を得て、隣人のため、社会のため、我らとして為し

得る最大最深の寄与を献じ得るであらう。（『三谷』第四卷、二六

頁―二七頁）

人生の苦難、悲哀は人間を鍛え、自己中心から脱出させ、社会のため、人々のために自らに与えられた能力を大いに用いさせてゆくことになる。しかも、かかる事に領く若者たちが寄り集まり、お互いがそれぞれの「神与の能力」を用いて補い合おうとするとき（相生関係）、世にある種々の混乱と絶望を超えて、平和な人類社会を創出する力となるう、と語る。この語りかけは彼を優れた教師、人格者として敬愛する若者たちに大きな感化を与えることになっただろう。

二 結婚、誕生、死

「神（『徹底他者』）に仕え、「愛実践の信仰」に生きようとする三谷は第六高等学校教授時代の一九二三（大正一二）年一月に児玉菊代と結婚した。父宗兵衛の死（一九一八（大正七）年五月）後、三谷は母こうと同居し、結婚の頃には、末妹寿貞子も引き取っていた。その寿貞子が兄の新婚生活の頃のことを「御恩恵の跡を省みて」と題する文章に記している。抄出する。

大正十二年の正月、心も姿も美しかった義姉菊代がわが家の一員となった時、母と長子と末子と三人の淡々として規則正しい水の流れのような毎日にパッと花が咲いた。はかなく散っただけにその短い生命は一層美しく思われる。夕の食卓には今迄の単調

を破って姉の心づくしの料理が並んだ。姉はオルガンが上手だった。土曜日の午後よく讃美歌を合唱した。姉はオルガンをひきながらリードしてアルト、兄がバス、私はソプラノ。よくできると「ホーラよくできた」と一番先に喜ぶのは兄だった。又一週間に何度か二人で英語の本を読んでいた。私は傍聴を許されて、内容はよくわからないままに姉が読んで訳し、兄が時々誤を指摘したり講義らしきことをするのをだまって聞いていた。勉強しておかねばお兄さんに叱られると言いながら一心に辞書を引いていた姉は本当に楽しそうだった。また連れだって六高の学生さん達もよく来訪された。(中略)そして母や私も加わって大きなテーブルを囲んで義姉の手料理と一緒にいたいた事も度々あった。(『三谷隆正——人・思想・信仰——』三三三頁—三三四頁)

結核を患ったこともあり、係累の重荷をも負う(同書、三四二頁、三四四頁)三谷と菊代との結婚生活は心やすらぐ、幸せなものであった。「徹底他者(『神』)」を二人で見上げ、祈り、キリストの教えに耳傾けて、ともに愛の実践を志そうとする、この結婚は神より最愛の同志をお互いに与えられたようだ。彼らは趣味を同じくし、ともに学び、学生、他の家族を大事にして生活する。三谷は神に祝福された陽だまりの処におかれたことを実感させられたことだろう。そうした二人の祈り合う風景が三谷の手で記されている。それは日本に戦争の影が落ちだした一九三二(昭和七)年に書かれた「嫁ぎゆく嬢に餞せし詞」の中に綴られている。

「私は自分の短い、そして真に幼稚な夫婦生活の経験に於いてさへ、

信仰に於いてする二人の結合が、どんなに驚くべく力強いものであるかを知って居ります。私が今も想ひ出す毎に、謂ひ難き力を増し加へらるゝやうに感ずる記憶は、二人して相祈つた時の記憶であります。それがどんなに私たちを力づけたか、今に至るまで力づけつゝあるか。これは決して誇張ではありません。(中略)私が殊にはつきり覚えて居りますのは、成婚後数月の或る夜、二人して特にあらたまつて聖書を読み合ひ、そのあとで相祈つたときのことです。その時私たちは多くの人のうへを想ひ出して、多くの人のために祈りました。さうして、その祈りの間に、K子はいつか泣き伏して居るのでありました。然しその夜の祈りがどんなに彼女を慰め、また喜ばしたか、そのことを私は彼女の死後、彼女の日記を読んで知りました。其の日記は彼女が若し死んだら読んでもいいといふ、生前からの約束の日記でありました。多分私が墓に降るまで、あの夜の祈りの記憶は、私を慰め又力づけて変らぬことであらうと思ひます。」(『三谷』第四巻、一九三頁)。

三谷は菊代と一緒に神の前に祈り合えた喜びを記している。結婚して間もない彼らはキリストの愛は「己」を棄てる愛であり、なによりもまず「他者の益」を願う愛であることを確認し合っていた。それは若い夫婦がお互いに心惹かれ合い、求め合うエロス(erōs)、二人だけの幸せを願う「閉じた愛」に生きることではなかった。若き二人には酷かもしれないが、キリストの愛に生きようとすることはまづ最初に、夫婦は自らを神の前に献げて、「棄私の愛」(『アガペー、agapē』)に生きよう、すなわち、「他者の幸せ」を求めて生きることである。三谷はこの夫婦による「棄私の愛」の具現化を「問題の所在」

(一九二九年発行)の中で次のように述べる。

夫婦道の本義は、夫と婦と相たづさへて己等を神の聖前に献ぐるにある。(中略)夫は己をすてゝ主に於いて妻を支へ、妻も亦己を忘れて主に於いて夫に仕へなければならぬ。家庭の主人は夫でもない、妻でもない、勿論子供でもない。神が家庭に於いても其主人でなければならぬ。夫妻は何よりも先づ祈りに相協同するものでなければならぬ。斯して我ら互いに己を忘れ主にありて他の益を計る為の道場で家庭がある時、家庭位我らを力づけ、高め、聖めるものは稀いであらう。其意味に於いてのみ結婚は人生の重大事である。『三谷』第一巻、一六一頁)

三谷は神の前に自らを献げることを最優先し、夫婦がともども神を見上げ、祈ることを第一として家庭生活をすることを綴っている。彼はあの「成婚後数月のある夜」、菊代と一緒に聖書を読み、人々のことをともに祈ることができたことをいつまでも忘れず、また、励まされつづけた。それは彼らがみ子イエス・キリストを十字架につけてまで、この世の一人ひとりを救おうとする神の愛を実感できるようになったからであろう。さらに、彼ら一人ひとりが「各自の分に應じたる十字架を背負」い、愛の実践を行う喜びを知ったからであろう(『三谷』第四巻、三三三頁)。

この神を中心とした家庭形成をする三谷夫婦のもとに、第一子が一九二四年三月七日に与えられた。長女晴子である。三谷は晴子と命名した理由と妊娠中と出産時の菊代の様子を「家庭団樂」(一九四一

年)に記している。彼が晴子と名づけたのはその春の朝の空が真っ青に澄み、「まばゆいほど晴れ晴れと明るく、両親の心をも晴れ晴れとさせたからであった。また、菊代の産前の健康は順調でなく、出産について心配したが、出産の折りは格別のこともなく、安産ですんだ、と述べる(『三谷』第二巻、二〇四頁)。そして三谷は晴子の誕生後すぐに、「親にとつて子ども」は「如何にかけがへなく貴いものである」(同頁)かを知らされたと言う。

彼は晴子が誕生した数日後の夜のささやかな幸福に満ちた光景を描き、残している。「私『三谷』は妻の枕頭に坐つて、唯二人きりそこはかなとなく物語りつつあつた。勿論そこには赤ン坊の赤い寝顔がある。私達二人は赤ン坊の将来について、夢のやうな希望や期待を語りあつた。わざと薄暗くしてあつた電燈のやはらかい光、みどり児特有の愛すべき乳臭、静もりかへつた夜気。其夜其時の光景は今もなほまざく私の眼底にある。如何に平和な、如何に清らかな、その団樂のよるこびであつたか。」(同書、二〇五頁)。

しかし、この鮮やかにいつもでも心に残る喜びはつかの間であつた。菊代は出産四日後ごろから、異常な高熱で苦しみ始めた。さらに、一九二四年三月末、最愛の長女晴子が天へと帰っていった(『三谷隆正—人・思想・信仰—』三五四頁)。

三谷は義弟山谷省吾夫婦にあてた一九二四(大正一三)年四月一日付けの書簡で、晴子の葬りについて記している。「今朝小生單身田舎道に春光を浴び乍ら火葬場まで歩きました。歩きながら四辺の春色を眺めながら、その何処にも死への連想のたねになるようなものを見出しませんでした。晴子の遺骨を拾ひながらも死よりもむしろ死でない

何ものかを感じました。昨日ほど涙も湧かずに遺骨を抱えて帰宅しました。(中略)階下の床に小机を置いて卓布をかけ其上に晴子の遺骨函を飾りました。花瓶などもいくつか配置しました。終にはおひなさまも同居して、晴子がひなまつりの御主人のようになりました。菊代は今朝は体温が六度、今日こそは九度まで上がらず八度八分でとまりました。最早回復の見込確実です。(中略)これから菊代の看護に全幅の注意を集中します。それが晴子の為めにも最もいい葬ひ合戦になるでせう。」「三谷」第五卷、四三七頁。

この手紙は三谷の悲しみ、苦しみを抑制して綴られている。しかし、いかに抑制しようと、じじつは彼からつつましく、ささやかな「三人の団欒」の幸せが失せ、取り替えることなどできない、かえけがえない晴子の成長への楽しみが奪われてしまった。そして一九二四年の岡山の暑い夏、三谷もまた病に倒れた。さらに、一九二四年七月四日、妻菊代が天へと召されていった。

三谷はその悲しみを綴っている。「菊代が亡くなる頃」私自身亦終にたふれて、臨終の妻をみとりすることができなかった。私は病褥に横臥のまゝ黙々として妻の棺を目送した。其時は涙さへ湧かなくなった。然し五日過ぎ七日過ぎて、私は黙々たるに耐へ得なくなつた。強ひて黙せば胸がはりさける。たまらなくなつて私は無茶苦茶に三十一文字を列べては枕頭の手帳に記した。

「いも逝きて十日を経なり朝まだき ふと泪わきてとゞめあへざり君逝けど君のいましゝ室にゐて もの言ひかはすまねしてみたり。」

が幸にして私の病気は順潮によくなつて行つた。熱もほどとれた。

或る朝私は床を出て、まだ埋葬せずにある二人の遺骨を合はせてひとつ壺に納め、それを床の間に安置した。」「三谷」第二卷、二〇五頁—二〇六頁。

三谷はこれまで、「徹底他者」を信頼し、真率に服従して生きてきた。インマヌエルを実感して生きてきた。しかし、この苦難はまことに大きく、厳しい。その苦難の中で、三谷は次の内容のことを田村ただし書簡(一九二四年七月二七日付け)に記している。

今日の哀みあるべきことは兼てから覚悟致して居りました。然し覚悟は覚悟、哀みは哀みで御座います。私の受けた創痕は深くあります。が神様が意味なしに私共を苦め給ふとは、どうあつても考へられません。然らば如何なる意味か、その内容は凡智の測り知るを難しとする所であります。私は敢てそれを付度しようと思ひません。「神は愛なり。」故に私は其愛に信頼します。さうして期待します。必ずや謂い難きの歎びは、やがて私共のものとなるであります。私の半生の実験が私をして斯信せしめます。恐らくは在天の彼女達(幼き晴子も若き母に先立つて天に帰りました)は、今後の私の為め人知れぬ力の源となつて私を支へ、私をして与へられたる使命を果たさしむべく、力を貸してくれることと存じます。その事を思うて私は力強く慰められ又励まされます。」「三谷」第五卷、四三九頁。

三谷は謙遜に愛の神を信頼し、その苦難に耐え、神の指し示す使命に生きると告げる。そして同年の秋には、彼の体力は回復していっ

た。しかも、その回復とともに、「極めて静かな、然し底深い力が、どこか天の方から来て私を支へてくれるやうな」(『三谷』第二巻、二〇六頁) 聖霊(プネウマ ハギオン *pneuma hagon*) 体験、神から「いのちの風(創世記二・七)」が吹き、支えられているとの実感を抱くようになっていた。そしてそこにはいつも、神を中心にした菊代と晴子と一緒の「家庭団欒」の喜びがあり、「パンひとつ、果物ひとつ分けあ」(『三谷』第二巻、二〇八頁) えた幸せへの感謝があった。苦難の十字架を背負って愛と救いに生きたキリストに信従し、弱小、有限なる自己を投げ捨て、つねに神に絶対の信頼をおく「自己献身」はこの最愛の人々を失った悲哀、苦難の体験を超えて三谷に次の確信をもたせていった。それが記されているのは彼の処女作『信仰の論理』である。この書籍は一九二六(大正一五)年四月、岩波書店より出版されている。そしてこれは妻菊代に捧げられている。抄出しよう。

私は(中略)私の来し方をかへり見て、そこに如実に他者の他力を体感し得る。その来し方を彩る大いなる転機にして、私が自ら計画し、その計画した通りに成就したのであるものは、殆ど一つだにない。私は私の一生を導くものが、私自身の思案工夫でなくして、或る大なる他者の力であることを実感する。私は私の私意私案が私の為に大なるもの、力あるもの又貴きものをもたらして呉れた事のあるを知らない。私の私案はいつもつまらぬものであった。徹底せぬ欲求であつた。妥協的愚案であつた。偶々その愚案の実現せられた時、私は自意を就げながら猶不満であることを免れなかつた。然し私のその愚案が粉碎せられて、思はぬ痛苦が

私の身に臨んだ時、その時に私は予期せざりし満足と激励と感謝とを己がものとする事が出来た。私は私の大なる幸福と人の想に過ぐる満足とが、決して私の思案によつて招来せらるゝものでなく、私の願はざる苦痛と思はざる艱難とを通して、他より与へらるるに相違ないと信ずるようになった。私は最早私自身の計画の成就されぬ事に失望しない。私は私を導く力が私自身より遥に大に、遙に賢くあり、私が私自身を愛するより以上に強く且つ正しき愛を以て私を包む、彼の他者の力と智慧とであることを信じて、安んじて勇躍して人生でふ不断の冒険を冒したく思ふ。私は最早怖るゝことを須^もるない。私の来し方は私にとつては意識的又は無意識的の冒険の連続に外ならなかつた。然し其裏に或る不思議なる力が断えず私を導きつゝあつたのであることを、私は如実に体験し得た。私にとつては彼の不可思議なる他者の力こそ、私を強ひて蜜と膏の滴る佳き地にまで導き、其処に私自らは欲望だにし得なかつたやうな歓喜と感謝とにあづからしむる所の、愛の御神の聖なる御導きに外ならない。

私がかく云ふ私の語気が甚しく主観的であることを承認しなければならぬ。けれどもそれが主観的であるだけそれだけ、私にとつては何ものにもまさつて確実堅固なる体験である。私は如此き他力の体験を基礎としてのみ、神を信じ得る、その愛に倚り頼み得る、永遠の生命を期待し得る。(中略) 信仰は智識でない如く、また感情でもない。たゞ誠実なる意志とその具体的表現に伴ふ、他力の実践的に如実なる体験、そのみが活ける信仰の活ける基礎である。信仰の基礎は如斯に個人的である。(『三谷』第一巻、

六五頁―六六頁)

彼は二人の死を通して知った「徹底他者」の愛に絶大な信頼をおき、その導きのもとで、使命(Ⅱ「法哲学の研究、若き学徒への教育」)に邁進しようとする。さらに、いつの日か、この地上を去り、二人に会えるときまで、愛の神に伴われつつ「神への服従の意義と、キリストを通して表わされた測りがたき神の愛」を具体的に語り、表そうとする。

三 異なる個人が支え合って

三谷は「エデンの園」で暮らすアダムとエバ(創世記二・七―二五)の生活を思い描くことがある。それは蛇に誘惑されて、エバとアダムが「園の中央に生えている木の果実」(創世記三・二―六)を食べる前の、神に「謙虚なる服従」をして、「幸福なる境涯」(『三谷』第三卷、五九―一頁)にある情景である。「徹底他者」に仕える彼には、文芸復興期(ルネッサンス)以来のヒューマニズム、「神から離れ、ただ」人が人である故に其故だけで人を尊ぶ」という思想に組することはできなかった(同書、五九―二頁)。アダムとエバが神のものとを去って暮らした「失樂園時代」以降は、人間が自らの限りなき欲望を露わにし、自己の利益、個の自由、権利などを求めて、激しく憎しみ合い、争い、殺戮し合っていた。彼の心に映るものは、徹底して利己にのみ生き、自己の権力の拡大に血眼になる哀れな人間の姿でしかなかった。もし、こうした人間に平等という「ものさし」を

あてるなら、「神の前には何の誇る」ところも持たない「罪人」としての人間、「神の聖さ」に照らされて「汚れ」にまみれた人間が浮かんでくる(同書、五七―〇頁)。また、そうした人間に、神の愛は等しく向けられ、その人間を神の愛する「器」「神の器」として等しく、貴いものとされる恵みと愛も見えてくる(『三谷』第一卷、一七四頁―一七五頁)。働きの違い、力の違い、年齢の違い、性差の違いなどがあっても、人間誰でも(「王侯も、市民も、奴隸も」)等しく「罪人」であるとともに、「神の器」である。

人間をこのように捉える三谷も、みどり児、晴子の死を思うとき、彼女は他に変えられない、かけがえのない貴い存在であり、そしてその喪失はなにをもってしても埋めあわすことなどできず、心に大きな空白ができたと実感する。しかも、その悲しみは、三谷がこの地上にある限り、「癒され果つることできない」(『三谷』第二卷、一九〇頁)ものであった。神の愛を深く実感し、「いのち」一つひとつが神より託された役割をもつ「神の器」だと捉える彼は、大愛の神、一つひとつのいのちを愛する神がなぜ無意味に「愛らしさの極みなる」みどり児を「活し」また「殺す」はずがないと確信していた。晴子の死を見つめるとき、大愛の神は「みどり児」にも、神が定めた清い「役割」を与え、人々を驚かす「雄偉壯麗」なるものと信じられた(『三谷』第一卷、一七四頁)。そして彼はダンテ(A. Dante 一二六五年―一三二一年)の『神曲』に助けられ、幼くして召されていたみどり児たち、その一人である晴子もまた神の愛護を受ける「天国の祝福された大円座」の中に迎えられ、彼女に用意された席につかせてもらっていることを信じ、想うのである(同頁、『三谷』第二卷、

一九一頁―一九二頁。

神本位に生きる彼はみどり児の晴子、妻菊代の死を体験して、神より与えられた「各人各様の天賦、役割」について思いを巡らしていた。彼は第一高等学校教授に任命された年の一九二九（昭和四）年一〇月に出版した『問題の所在』の中に次のことを記している。「自然を觀よ、何といふ調和でせう。そのいとも小き部分が、そのいとも大なる部分と相和して、いかに小さきに拘らざる大さの役目を果たして居ることとせう。そこには何ひとつ無意味または無益と見ゆるものがありません」（『三谷』第一卷、一七二頁）と。

神が造った自然の美しさと、創造の不思議さを想いつつ、自然の調和に感嘆している。そこには、「権利」「自由」「無差別な平等」を求める強い声もなく、神への讃美を忘れ、限りなき欲望を満たそうと奔走する存在もない。それぞれが神より与えられた「各人各様の天賦」を尊重し合い、「神の器」としての役割を認め合い、謙遜に、喜びもって、助け合っている情景である。それはあたかも、パウロが提示した「各人各様の天賦」「神の器」としてのそれぞれの役割」を尊び合い、そのお互いを尊重し合う愛を基盤とした「有機的団体」「神の愛に満ちた社会」を髣髴させる（『三谷』第三卷、五八四頁―五八五頁、コリントの信徒への手紙一 一二・二―三三）。

パウロが描き、三谷も求める「神の愛に満ちた社会」は、各人各様の「五タラント、二タラント、一タラント」（マタイによる福音書二五・二五）の異なる「天賦」を輝かして補い合い、配慮し合い、支え合う。そして、そこで暮らす構成員はその一人の「苦しみ」を自分たちすべての苦しみとし、一人の「賞賛」を構成員すべての「喜び」

(10)

とする。この違いを認め合う考え方、生活の仕方は変化のない、進歩のないものと捉えられ、また、「平等無差別」な権利要求の運動、「階級撤廃」の闘争をも阻むものと見なされ、忌避されるかもしれない。しかし、三谷はそのことを知りつつも、「神を忘れた人間と自己の利益のみ」を優先するあり方を拒絶する。そして彼は愛の神に徹底して服従し、自己を棄てて、神にすぎる他力をもって自らの使命に生きようとする。また、「他力」「服従」から描かれる「理想社会」の建設、「神の国」の光を受けた「愛の満ちる社会」の創設に励もうとする。この構想の時期は日本が次第に海外への侵略を行い、戦争へと向かうとする時と符合する。教育者、新渡戸を敬愛する彼は高等学校教授として、真理を示し、人間教育に、教養教育に取り組もうとする。そして指導する有為な青年たちにも、各人各様の天賦が相和す「理想社会」の実現に力を尽くして欲しいとの望みがあった。

彼の目には、イザヤが描く「理想の社会」が見えていたのだろう。預言者イザヤは大国アッシリアがイスラエルに侵略（紀元前八世紀）し、イスラエルの人々から正義と愛が消え、不正と横暴があふれだす、その北イスラエル（南ユダも含んだイスラエル）に「理想の王（メシア、キリスト）」が誕生する。そしてその「王」が平和な、理想の社会を創出するのだと預言する。イザヤが伝える「メシアの社会」は平和な、お互いが助け合い、尊重し合う処である。

「狼は子羊と共に宿り、豹は子山羊と共に伏す。子牛は若獅子と共に育ち、小さい子供がそれらを導く。牛も熊も共に草をはみ、その子らは共に伏し、獅子も牛もひとしく干し草を食らう。乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ、幼子は蝮の巣に手を入れる。わたしの聖なる山において

は、何ものも害を加えず、滅ぼすこともない。水が海を覆っているように、大地は主を知る知識で満たされている。」(イザヤ書一・六―九)。

真理を愛し、正義を愛し、神に服して人を愛する三谷はこの日本に「理想の社会」が出現することを祈り、働くうとする。彼が真理に生き、働く旅人として、岡山を去って、東京へ戻ったのは一九二六年四月。先に述べた最初の真理探究の著書『信仰の論理』はこの四月に出版された。

資料、参考文献

- 『三谷隆正全集』第一巻岩波書店、一九六五年。
- 『三谷隆正全集』第二巻岩波書店、一九六五年。
- 『三谷隆正全集』第三巻岩波書店、一九六五年。
- 『三谷隆正全集』第四巻岩波書店、一九六五年。
- 『三谷隆正全集』第五巻岩波書店、一九六六年。
- 『三谷隆正―人・思想・信仰―』岩波書店、一九六六年。
- 『三谷隆正の生と死』新地書房、一九九〇年。
- 内村鑑三著『基督信徒のなぐさめ』警醒社、一九一三年。
- 内村鑑三著『苦痛の福音』警醒社、一九二四年。
- 『新渡戸稲造全集』第九巻教文館、一九八四年。
- 『新渡戸稲造全集』第二三巻教文館、一九八七年。
- ダンテ著、山内内三郎訳『神曲』上・中・下岩波書店、二〇〇四年―二〇〇六年。
- 『三谷民子―生涯・想い出・遺墨―』女子学院同窓会、一九九一年。
- 村松道著『三谷隆正研究―信仰・国家・歴史―』刀水書房、二〇〇一年。

- 政池仁著『内村鑑三伝』教文館、一九七七年。
- 『ユダヤ思想』I 岩波書店、一九八八年。
- 『聖書を読む(旧約篇)』岩波書店、二〇〇五年。
- L. J. Topel, *The Way to Peace* (New York: Orbis Books, 1979)
- M. Saperstein, *Essential Papers on Messianic Movements and Personalities in Jewish History* (New York: New York University Press, 1992)
- A. E. McGrath, *Christian Spirituality* (Oxford: Blackwell Publishers, 1999)
- B. D. Ehrman, Peter, Paul, and Mary Magdalene (Oxford: Oxford University Press, 2006)